そこにある「ほんとうの現実」

——スペインにおけるヒターノ（ジプシー）の呼称をめぐる社会問題
という事例から——

“Actual Reality” in the Field:

A Case Study of the Social Problem behind the Nomenclature for Gypsies in Spain

久野 聖子

KUNO Kiyoko

The “social categorization” and normative judgments imposed by analysts or third parties sometimes conceal the reality surrounding each person who is actually “discriminated against”. It is also apparent in the unilateral movement to change the nomenclature for Gypsies to “Roma” without listening to the parties concerned. In order to reveal the “actual reality” surrounding us, therefore, it is necessary to elucidate what interactions exist between the persons at each position in the asymmetric “category placement”. The objective of this article is to clarify the problem Gypsies are faced with in their real life and the “actual reality” in the field by grasping the “asymmetric power” and “category placement” in our society and by listening to the parties concerned.

1. はじめに

10 世紀にインド北西部を後にし、ヨーロッパを中心に拡散した、英語でジプシー、フランス語でツィガーヌやマヌーシュ、ドイツ語でツィゴイナー、スペイン語でヒターノなどと呼ばれるマイノリティ集団がある。これらの呼称は、エジプト人であるという誤認や、「不可触民」を意味するギリシャ語から由来しており、外部の人からの呼び名である。

集団名には自称を用いるべきであるという潮流に乗って、現在、世界のマスコミをはじめとする多くの機関では、これらの呼び名から「ロム／ロマ」⁽¹⁾という「自称」へと呼び換えが行われている。また、「ジプシー」という表現を使用しているジプシー関連団体なども、世界レベルでは数少ない。その背景には、彼らに対する差別と「ジプシー」という呼称が含みうる差別的な意味が考えられ、実際、第三者や当事者のうちでも知識人などを主体とする呼び換え推進派は、差別的な意味をもつ呼称を使用するのは問題であることを理由に運動を展開している。他方、スペインでは、ヒターノ（ジプシー）に対する根強い差別があるにもかかわらず、呼び換えを行っているマスコミ・行政機関やジプシー関連団体も少なく、フィールドにいる当人たちも〈ヒターノ〉という呼称を使用し続けている⁽²⁾。しかし、世界レベルの呼び換え推進派の動きは強く、あらゆる場所で「ジプシー」から「ロマ」へと呼び換えが行われているのが現実であろう。

本稿では、呼称や呼び換えの問題を糸口に、スペインのヒターノを取り巻く現状を明らかにすることを試みる。そのなかで、600 年近い年月を経てスペインに存在し、いわゆる移民とは異なる国民としてのヒターノが、国境を越えた人びとの移動が激しくなるヨーロッパ社会の中で、どのような特殊な状況に置かれているのかに注目し、フィールド⁽³⁾における筆者の問いかけと彼らの答えなどのやり取りに目を向けることにより、スペインに

おけるヒターノの生の営みや彼らを取り巻く現実などについて明らかにしたい⁽⁴⁾。

2. 問題設定

『ジプシー』と呼ぶのは問題である」という一般的な定義の広がりによって、当事者であるジプシーの問題認識は私たちに見えにくいものとなっている。

このような事態の要因として、ジプシーを取り巻く人々が、人権擁護の視点から、「ジプシー」などの特定の呼称を「差別用語」とであると規範・客観的な意味付けを行っていること、また、ジプシーのような被差別の立場にありうる人々を「差別されている人々」として社会的にカテゴリー化し、そこに権力を働かせてしまっていることが考えうる。さらに、このようなカテゴリーの与件や非対称的な支配・権力関係の問題は、当事者と社会学者との間にも一般的に存在する〔水津 1992:109; 栗原 1996:22-25〕。このような二重の圧力により、当事者の問題認識は覆い隠されてしまう。

このような事態に対し、当事者側の理解や解釈から社会現象を解明するアプローチが再検討された。そして、このアプローチが抱える行為者の主観や主体性への偏重や客観／主観といった二項対立の問題解決のために、「状況における規範の使用（状況定義）」という媒介項が見直され、規範と行為とを直結させず、行為が規範に与える影響やその状況を定義する時間的側面をも考慮に入れることが可能となった〔坂本 1989; 佐藤 1991:11〕。また、構築主義が注目を浴び、ジェンダーやセクシュアリティの分野において大きな成果を生んだ。しかし、その一方で、社会問題については、その存在に関する脱客観主義をめざし、「クレイム」という当事者からの声を重視したはずの構築主義的アプローチ〔Kitsuse and Spector 1977=1990〕が、逆に、特定の社会状態を社会問題とする分析者の恣意的な判断を伴っているという批判を受けている〔Woolgar and Pawluch 1985=2000〕。

このような批判は、すべての社会科学が避けては通れないだろう。しかし、問題は別の場所に存在する。西阪は、キツセラが「クレイムの有無」という社会問題の厳密な定義や概念化を追い求めるあまり、我々を取り囲んでいる「ほんとうの現実」⁽⁵⁾を取り逃がしてしまう危険性があることを指摘する〔西阪 1996:66-74〕。また、非対称的なカテゴリー配置によって、『ジプシー』と呼ぶのは問題であり、『ロマ』と呼び換えるべきである」というクレイムが力をまとい、『ロマ』という総称で呼び換えずに、『ヒターノ』と呼んで欲しい」というヒターノたちの声が覆い隠されてしまっているという現実を見逃してしまうことになる。そして、ヒターノからの声が聞こえないからそこには問題がないとする、もしくは、聞き取れるクレイムだけをもってして「それが社会問題である」とすることで、社会の現実を暴いたことにはならないだろう。

従って、問題を抱える人びととその周囲の人びとによって、問題に対処していくために手段が講じられるにつれ、曖昧にみえる問題そのものがより明確化していくことをエマーソンらが指摘したように〔Emerson and Messinger 1977:123〕、呼び換えをめぐる問題を明らかにするためには、非対称的なカテゴリー配置の高位にあるとされる人々と低位にあるとされる人びとの間で、問題をめぐってどのようなやり取りが行われているか、に注目する必要がある。そして、このカテゴリー配置によって覆い隠されてしまっているどのような「ほんとうの現実」が存在するのか、これを見出すことが社会学者には求められているのではないだろうか。そのためには、研究者はまず、我々の社会にある非対称的な権力やカテゴリー配置を認識することから始めなければならない。

このような問題認識から、続く第3節では、ヒターノたちの「クレイム」にならない声に耳を傾けるためにも、まず、社会的なカテゴリー集団としての「ヒターノ」から解放された、個々の「行為体」としての〈ヒターノ〉について、スペイン社会におけるヒターノへの「呼びかけ」と「呼びかけの不完全さ」の視点から明らかにする（第1, 2項）。続いて、このヒターノが認識する〈ヒターノ〉と「ロマ」との違いと、この違いを前提とした当事者たちの「私は《ヒターノ》だ」という主張とを提示し、この違いを無視した「ロマ」という総称への呼び換えが引き起こす問題について明らかにする。そして、『「ロマ」』ではなく《ヒターノ》でなくては困る」という当事者の問題認識や言説が、非対称的な権力やカテゴリー配置を伴った『「ヒターノ」』と呼ぶのは問題である」という非当事者の認識によって覆い隠されており、覆い隠されているというこの事実が明るみにでることなく、『「ヒターノ」』と呼ぶのは問題である」と定義されたものを、あたかも本当の問題であるかのように我々は仕立て上げてしまっている、という「ほんとうの現実」について、筆者の問いかけとヒターノの答えのやり取りから明らかにしていく（第3項）。

3. スペインのヒターノ——事例から——

（1）「行為体」としての〈ヒターノ〉

1) 「呼びかけ」と「呼びかけの不完全さ」

まず、はじめに、呼び換えをめぐる問題に直面している人びとを、一方的に押し付けられる社会的カテゴリーから解放し、客観／主観などの二項対立を乗り越える形での「行為体（主体）」⁽⁶⁾として捉えることから始めなければならない。そこで、ヒターノに対する「ヒターノ」や「ロマ」という「呼びかけ」の行為に注目し、そこから、現実直面しているヒターノという存在について明らかにしたい。

アルチュセールが示したイデオロギーからの「呼びかけ」[Althusser 1970=1993]は、「呼びかける」という外からの刺激と「応える／応えない」という内からの反応、つまり、客観／主観や構造／主体などの二項対立の「橋渡し」のようなものとして考える。

しかし、アルチュセールが神の声としての「呼びかけ」に絶対的な力を与えたのに対し、バトラーは、この「呼びかけ」に必ずしも振り向く必要がないと批判する[Butler 1997=1998:32-33]。そして、バトラーは、この「呼びかけ」が、呼びかけで想定された存在として相手を固定する一方で、「予測されなかった新しい可能性」を生み出すことを指摘し[Butler 1997=1998:8]、それは、「呼びかけ」の背後にある権力やイデオロギーのようなものに反駁する可能性を秘めた「行為体」の形成を意味している。しかしながら、我々の存在には他者からの「呼びかけ」が不可欠であることもバトラーは指摘する[Butler 1997=1998:11, 28-29]。振り向くか否かは別として、人は「呼びかけ」を受けることによって初めて存在することができ、「呼びかけ」を受けないことは、その人の社会的不在をも意味してしまうのだ。

また、「呼びかけ」に必ずしも振り向く必要がないというバトラーの主張は、「呼びかけの不完全さ」という彼女自身の言葉で言い換えうる[Butler *et al.* 2000=2002:24]。つまり、客観的に意味付けされた「呼びかけ」としての「ロマ」や「ヒターノ」は、「呼びかけ」を受けた者が意味付けする自称としての〈ロマ〉や〈ヒターノ〉と一致せず、両者の間に「溝」が存在するのだ。バトラーは、その「溝」において、「呼びかけ」をすり抜けながらパフォーマティヴに構築されていく「行為体」の存在を見出しており、この不完全

な呼びかけにおいて、「呼びかけ」が押し付けてくる力をかわす力を秘めた行為体〈ヒターノ〉が生まれるのだ。このヒターノは、判断力の欠如した主体とも、独我論的に存在する主体とも異なり、その「溝」において、呼びかけに反応したり抵抗したりする自分の行為について再帰的モニタリングを繰り返している。それは、他者との交流や他者からのまなざしを経て相互主観的に立ち上がり、そして、自己に回帰する「主体」、つまり、他者からカテゴリー化された「客我」に対して革新を起こす「主我」のようなものであると言える⁽⁷⁾。

2) スペイン社会における「溝」と「行為体」としての〈ヒターノ〉

それでは、この「溝」はなぜ、そして、どのように存在しているのでしょうか。これについては、スペイン社会とヒターノ社会が抱える特性などから、二つのことを指摘しうる。

一つ目は、ヒターノ社会の特性とスペイン社会の変容からの指摘である。ヒターノは一般に、地縁・血縁などによって多様な下位集団に分類され、横の繋がりはほとんどない。例えば、悪名高いエストレマドゥーラ系や評判の比較的良好なマドリッド系などが存在し、彼らは相互に拒絶しあうことも多い。また、ヨーロッパ内の国境を越えた人々の移動が激しくなり、スペイン社会も大きく変容している。多くの東欧系ジプシーがスペインへ流れ込み、スペイン系ヒターノと東欧系ジプシーも文化的な違いなどから互いに差異化を図っている。このように、「ヒターノ」や、あらゆるジプシーを総称した「ロマ」というカテゴリーのなかでの下位集団は実に多様である。それゆえに、ひとくちに「ロマ／ヒターノ」という呼びかけを受けても、自分が何者であるかについての選択肢が多いため、例えば、「私はあなたが指す悪しき『ヒターノ』とは異なる、善き《ヒターノ》です」と返すことが可能となるのだ。つまり、この選択の幅、すなわち、「溝」の存在が、周囲からの非対称的な権力とカテゴリー配置を伴った呼びかけを受けたり、かわしたりすることを可能にし、スペイン社会が押し付ける力に抵抗する能力を秘めた「行為体」としてのヒターノを生み出すのである。

二つ目は、スペイン社会におけるヒターノの位置からの指摘である。カルボ・ブエサスによって国内6千人の小・中・高校生（職業訓練校生を含む）に対して行われたアンケート調査は、スペイン社会においてヒターノは、マグレブ系の移住者を差し置いて一番の「嫌われ者」であるという結果を示した〔Calvo Buezas 2000〕。非ヒターノの多くは、ヒターノを泥棒や麻薬犯罪などと結び付け、自分たちがヒターノの犯罪による被害者であるという認識がむしろ強いことが、この背景にはある。しかも、ヒターノに対する嫌悪感は600年近い年月の間に強化され、もはや彼らを「かわいそうな被害者」として定位することはない。しかし、その一方でヒターノは、国家政策の「かわいそうな被害者」として自分たちを戦略的に描き、抵抗の道を見出そうとしている（この詳細は後述）。このように、スペイン社会においては、ヒターノ／非ヒターノの両者がともに被害者であることを主張しており、被害者がどのように「生産」されるかを分析することは、どのように社会問題が現れるかを理解する核となると述べたホルシュタインらに従うなら〔Holstein and Miller 1990:117〕、これは、両者にとって、ヒターノをめぐる社会問題が中立的に現れていることを示しているのではないだろうか。つまり、スペインにおいては、この中立性が、呼びかけの「溝」における、両者それぞれの主張の対等なやり取りを可能にしているのだ。

次項では、「呼びかけの不完全さ」において構築されていく「行為体」としてのヒター

ノについて、彼らに対する多様性の認識と照らし合わせながら考察する。

(2)「不均質性」の自己認識の強さと「呼びかけの不完全さ」

「ヒターノ」にまつわるイメージに関して、スペイン南部のアンダルシア州・グラナダ県において、11歳から15歳のヒターノ55人と非ヒターノ2549人を対象にアンケート調査が行われた [Gamella y Sánchez-Muros 1998]⁽⁸⁾。

この調査では、「ヒターノについて知っていることは何ですか」など、それぞれの質問に対して生徒が自由に回答する記述方式が取られた。そこでは、ヒターノ自身と非ヒターノによる回答、都市部と農村部における回答が対比させられている。表1は、全ての質問に対する回答のなかで、ヒターノの「不均質性 (heterogeneidad/ heterogeneity)」に触れた回答者が占める割合を示したものである。この「不均質性」に触れた回答とは、「善い／悪い／親しみのある／貧しいヒターノ」など、ヒターノを3つ以上のカテゴリーに分類するものであり、ヒターノのなかの多様性に対する認識を表している。

表1のとおり、ヒターノの「不均質性」に触れた回答者の割合は、都市部と農村部とを平均すると、ヒターノと非ヒターノとではさほど差がない。しかし、農村部よりも都市部において、ヒターノ自身の「不均質性」に触れた回答者の割合は高く、これは、非ヒターノに関しては都市部と農村部で大差がないのとは対照的である。1950-60年代の工業化と農業労働力の低下により、各地方から都市へと一般労働者に混じって多くのヒターノが流入した。また、農村部に比べて都市部においての方が、他県から移住してきたヒターノが多いことは先行研究によって明らかにされている [ISA 1978=1990:30]。さらに、東欧から移住してきたジプシーが、「ヒターノ」として括られる人たちのなかの不均質性を高めていることは想像するに難くない。しかし、ここでは、「都市部においては、東欧系ジプシーやさまざまな血縁・地縁を持つ多様なヒターノが存在し、ヒターノの不均質性が高い」という非ヒターノ／ヒターノ両者にとって共通の事実のなかで、ヒターノの方が非ヒターノに比べてその不均質性を敏感に察知しており、逆に、非ヒターノは彼らを単一のカテゴリーに収めようとする傾向がある、ということが重要である。つまり、この不均質性の自己認識の強さが、ヒターノに投げかけられる「呼びかけ」にヒターノが振り向くか否かの選択をさせ、「私はあなたが指している『ロマ／ヒターノ』とは異なる《ヒターノ》だ」という答えを導かせうる、「呼びかけの不完全さ」や「溝」と大きく関わっているのだ。

次に、「行為体」としてのヒターノが、「ヒターノ」という言葉にどのような新たな意味付けを行い、自己に付与する〈ヒターノ〉と一般化された総称としての「ロマ」との違いをどのように認識しているのか、について明らかにする。そして、「私は《ヒターノ》だ」という当事者の声が覆い隠されてしまうその背後に、どのような「ほんとうの現実」が存

表1 全質問に対する回答のなかで一度でも「不均質性」に触れた回答者が占める割合

ヒターノ (55人)		非ヒターノ (2549人)	
都市部 (14人)	農村部 (41人)	都市部 (938人)	農村部 (1611人)
50.0% (7人)	31.7% (13人)	38.7% (363人)	39.1% (630人)
36.4% (20人)		39.0% (993人)	

出典) Gamella y Sánchez-Muros 1998:370 より抜粋、作成。

注) 下段は都市部と農村部の平均。

在するののかについて、筆者の問いかけとヒターノの答えなどのやり取りから明らかにする。

（３）ヒターノの主張——私たちは〈ヒターノ〉だ——

1) 〈ヒターノ〉への新たな意味付け

ヒターノが〈ヒターノ〉という言葉に付与する意味は、非ヒターノが付与するものとは異なる。ここでは、ヒターノ自身の〈ヒターノ〉への意味付け直しについて明らかにする。

侮蔑的な意味合いのみで投げかけられるものでなければ、彼らは一般に「ヒターノ」という呼称を拒絶せず、むしろ、自分たちは「《ヒターノ》だ」と主張する。そして、ヒターノと非ヒターノの違いを、非ヒターノ側が「逸脱」として認識しがちなのに対し、ヒターノは積極的に受け止める傾向がある。例えば、「《ヒターノ》はとても誇り高い。自分たちの文化の価値や根の部分を大切にす。だから、もし、これらを失わなければならないなら、マージナルであり続けることの方を望む」という A さん（36 歳の男性・2003/09/10 インタビュー）の意見である。

すなわち、ここで A さんは、非ヒターノに「同化」しないという選択をする上で、社会が客観的な規範的価値判断を伴わせつつ「逸脱」であるとする「マージナルであること」に対し、意味付け直しを行い、「マージナルであること」を自分たちが非ヒターノに対して持つ「違い」の一つとして積極的に選択し、認めようとしている。

また、A さんは、「ロマ」としてではなく、〈ヒターノ〉としてでなくては、自分たちが被った奴隷制度や差別などの経験を語り得ないことも指摘した。さらに、「東欧系ジプシーからすれば、スペインのヒターノは『ライト light』」であり、彼らから自分たちが「本物ではない」とみなされていることを明らかにし、その原因を国家による強制的な同化政策に求めている（2003/09/10 インタビュー）。つまり、自分たちの境遇や「本物のジプシーではない」原因を国家側の責任とするためにも、「スペイン」を意識させない「ロマ」ではなく、新しく意味付け直しをした「スペインの《ヒターノ》」という呼称を、ヒターノは受け入れる必要があるのだ。

このように、ヒターノは、非ヒターノが用いる規範的な意味付けとは異なり、「マージナル」や「被害者」に対して状況に応じたポジティブな意味付けをし直し、「マージナルであるという『違い』を持った」、「スペイン国家の被害者」としての〈ヒターノ〉という、ヒターノの不均質性の高さにおいて別の〈ヒターノ〉を選び、立ち上げているのだ。

2) 〈ヒターノ〉と「ロマ」との違い

ヒターノにとって、自らを「ロマニ／ロマノ（ロマ）」として認識することは、〈ヒターノ〉として認識することと同じではない。ここでは、「私は『ロマ』ではなく《ヒターノ》だ」というヒターノの声のもとともなる、〈ヒターノ〉や「ロマ」に対する当事者たちの意味付けの違いについて明らかにする。

インタビュー調査において、B さん（33 歳の男性・2003/09/24 インタビュー）は、「あなたは『ロマ』ですか」という筆者の質問にはじめは「ロマ」という言葉が理解できなかった。そこで、「ロマ」を「ロマノ」という単語に置き換えて再び質問したところ、「いいえ」と返し、「なぜあなたは『ロマノ』ではないのですか」という新たな質問に対しては、「僕は《スペイン人》、《スペイン系ヒターノ》だから」と答えている。また、C さん

(39歳の男性・2003/09/10 インタビュー)も、『『ロマノ』と呼ばれるか、『カロ』⁽⁹⁾と呼ばれるかあなたはどちらを好みますか』という筆者の質問に対し、「もちろん《カロ》。僕は《カロ》だ」と答え、「僕にとって、『ロマノ』は、ルーマニアに住んでいるジプシー⁽¹⁰⁾を意味する」と説明している。

〈ヒターノ〉と「ロマ」とに付与される意味の違いは、当事者を取り巻く状況や背景に依存する。例えば、このBさんやCさんが自らを〈ヒターノ／カロ〉と認識するのは、近年の「東欧系ジプシー」の流入というスペイン社会の変化と深く関わっており、この「東欧系ジプシー」との差異化を図るために、自らに対して行う〈スペイン系ジプシー〉という意味付けを必要としているのだ。さらに、先述のAさんは、ヒターノ支援団体の一員として国際会議等に参加しており、「海外に行った時、あなたはどのように自己紹介しますか」と彼に質問したところ、「他の国のジプシーと話すときは、《ロマニ》で、スペイン内では、《カロ》。《ロマニ》はヨーロッパ人、《カロ》は《ヒターノ》(という意味)である」と説明した(2003/09/10 インタビュー)。このように、ヒターノは、意味付けの違いや、関わる他者と状況の違いに従い、切断面を移動させながら多様なヒターノから自らを選び取り、差異化させているのだ。

以下では、当事者たちが付与する〈ヒターノ〉と「ロマ」との意味の違いを無視した「ロマ」という総称での呼び換えが引き起こしうる問題や、そこにある「ほんとうの現実」について明らかにしていく。

3) 筆者の問いかけと当事者の言説、そして、そこにある「ほんとうの現実」

「私は《ヒターノ》だ」と声をあげる際に、彼らが資源の一つとして想定する規範的価値などに触れつつ、以下では、筆者の問いかけとそれに対する当事者の答えから見える、彼らが定義する問題とそこにある「ほんとうの現実」について明らかにする。

インタビューにおいてBさんは、自らを「ロマノ」から差異化させる際に、「僕は『ヒターノ・ロマノ(ここでBさんにとっては、「東欧系ジプシー」を意味する)』じゃないよ。だって、僕は“ファローラ”(失業者が街頭で販売する新聞)を売ったりしないし」と言及し、スペインでの生活が不安定な「東欧系ジプシー」ではなく、自分がスペインでの生活に根付いている〈ヒターノ〉であることを選び、主張している(2003/09/10 インタビュー)。また、Cさんは、「最近やってきている東欧からのジプシーを知っていますか」という筆者の質問に触れ、彼らは自分たちとはすべてにおいて「完璧に異なる」と述べ、『『ルマーノス』⁽¹¹⁾に対して親しみは感じますか』という質問に対しては、「はい、もちろん」、「でも、本当のことをいうと、今スペインにいる『ルマーノス』たちは、我々《カロ》にとって一つの恥である」と答えている。その理由に関して、麻薬や人身売買の問題に触れながら、「というのも、彼らはいっぱい過ちを犯すし、それは我々《カロ》にとっては……(言葉を濁す)」、「だって、子どもたちを放ったらかしにしたり、地下鉄の出入り口で物乞いをしたり……、そういうのは我々の文化にはない」と述べており(2003/09/03 インタビュー)、彼は、「ルマーノス」が罪を犯したり、異なる文化・道徳的側面を持っていたりする点において、自分たち〈ヒターノ〉を「ルマーノス」から差異化させているのだ。

さらにCさんは、「彼らは彼らでルーマニアの文化を持っているし、我々は我々でスペインの文化を持っていて、それらはとても違う。それはジプシーであるか非ジプシーであるかの違いではなく、ルーマニア人であるかスペイン人であるかの違いである」と述べる(2003/09/03 インタビュー)。Cさんのこの言葉によって、何かがシフトしたような衝撃を

私は覚えた。この言葉と私が受けた衝撃は、ヒターノへの呼びかけをめぐる問題の背景に潜む「ほんとうの現実」の存在を我々に知らしめてはならないだろうか。

ここでCさんは、〈スペイン人〉と「ルーマニア人」との違いに焦点を合わせており、ヒターノと非ヒターノとの間にある違いは彼にとって重要性が低い。つまり、彼にとってここで重要な境界線は、ヒターノと非ヒターノの間にあるのではなく、〈スペインのジブシー〉と「ルーマニアのジブシー」の間にあるのだ⁽¹²⁾。そして、これらの違いや境界線の位置を明らかにするためにも、自分は、不均質性を均した「ロマ」ではなく、不均質ななかでの個性や違いを打ち出した〈ヒターノ〉でなくてはならず、その不均質性や違いが無視されていることが彼にとっては問題であるということが、この言葉から理解しうる。

これに対し、調査者としての私は、ここで、「ヒターノ」と「非ヒターノ」との間にある違いや規範的価値判断を伴った差別問題に焦点を合わせ、「ロマ」のなかにある不均質性や違い、そして、「ヒターノ」と「非ヒターノ」との違いを超えつつ形成される〈スペインのヒターノ〉という彼らの認識や自己主張などを、問題の背後に退かせてしまっていたために彼の言葉に衝撃を受けるに至ったのだ。

すなわち、我々を含む非当事者は、カテゴリー化されたヒターノやロマのなかの不均質性や違いをよそに、「ヒターノ（やロマ）と非ヒターノの間には大きな違いや差別があり、この差別をなくすためにも『ヒターノと呼ぶのは問題である』」とはじめから決め付け、そこから問題の定義を始めるのに対し、当事者は、「ヒターノと非ヒターノの間にある違いよりも、例えば、『生活の糧をもち、犯罪に手を染めない善いスペイン系ヒターノ』と『貧しく、犯罪に手を染める悪い東欧系ジブシー』などといったものの中にある違いが重要であり、カテゴリー化されたもののなかの不均質性や違いが無視されていることが問題である」というところから問題の定義を始めている。そして、この当事者の『『ロマ』ではなく『ヒターノ』でなくては困る』という問題認識や言説が、『『ヒターノ』と呼ぶのは問題である』という非対称的な権力やカテゴリー配置を伴った非当事者の認識によって覆い隠されており、覆い隠されているということ自体が明るみにでることもなく、『『ヒターノ』と呼ぶのは問題である』という定義されたものを、あたかも彼らが直面している本当の社会問題であるかのように我々は仕立て上げてしまっている。そのような「ほんとうの現実」がそこにあることを、私が受けた衝撃は明らかにしている。

4. おわりに——ヒターノの生のリアリティと残された課題に向けて——

以上、スペインにおけるヒターノへの「呼びかけ」を糸口に、そこにある「ほんとうの現実」について明らかにしてきた。この「ほんとうの現実」の深部にあるスペイン社会におけるヒターノの生のリアリティについて、最後にもう少し触れてみたい。

スペイン社会においてヒターノは、「ヒターノ」と「非ヒターノ」、「ヒターノ」と「東欧系ジブシー」など、それぞれの状況に従ってカテゴリーの切断面を形成し分けている。こうして、「東欧系ジブシー」と差異化を図るために「ヒターノ」と「非ヒターノ」の境界越えを望む一方で、ヒターノは、非ヒターノ文化に対抗する自文化への優越感や非ヒターノ文化への「同化」に対する否定的感情を持っている。この矛盾した複雑な心情が、「ヒターノ」と「非ヒターノ」の境界越えと「ヒターノ」としての自己定義との間の揺れをもたらし、ヒターノの生のリアリティを複雑なものにせしめている。

また、スペイン社会においてヒターノは一番の「嫌われ者」であり、非ヒターノは自分

たちをヒターノによる犯罪などの被害者だと認識している。その結果、ヒターノが「ヒターノ」と「非ヒターノ」の境界越えをしようとすると、非ヒターノ側は境界線を明確に打ち出して彼らの接近を許さず、彼らを「かわいそうな被害者」として定位することもない。しかし、その一方でヒターノは、非ヒターノに対する優越感を見出しつつも、国家政策の「かわいそうな被害者」として自分たちを戦略的に描き、抵抗の道を見出そうとしている。

だが、ある人々を「かわいそうな被害者」とカテゴリー化し、彼らが抱える問題を「被害者パラダイム」[Emerson 1994:21] から捉えることは、彼らの声に聖性を付与したり、彼らを弱くて受動的な存在として捉えたりすることに繋がる。それは、やはり非対称なカテゴリー配置を意味し、そこからは「ゆがんだ現実」しか見えてこない⁽¹³⁾。従って、スペイン社会においてヒターノは、「かわいそうな被害者」として定位されることが少ないというこのことは、視点を変えれば、我々が彼らを取り巻く「ほんとうの現実」を明らかにできるという可能性の広がりの意味してはいないだろうか。つまり、スペイン社会においては、ヒターノと非ヒターノのどちらが被害者であるのかが分からない中立の状態にあり、そのことによって、「呼びかけの不完全さ」や呼びかけの「溝」におけるヒターノと非ヒターノ両者からの主張がぶつかり合うことが可能となっている。その結果、「被害者」のポジションをめぐる争い、多様な切断面で揺れるヒターノの複雑な生のリアリティや我々を取り囲む問題が、非当事者と当事者の比較的バランスのとれた力のせめぎあいにおいて理解されうる可能性があり、「ゆがんだ現実」が生み出されるリスクも低くなっているのだ。

しかし、課題は山積みである。他のエスニック集団とは異なり、識字率が低く、メディアにも訴えかけず、さらに、地縁・血縁をめぐる内部分裂が深刻であるために団結したエスニック運動を形成し得ないヒターノたちを対象にする場合は、彼らの声を直接聞き取ることは難しい。しかし、ヒターノ社会の内部分裂や、ヨーロッパにおける人びとの移動と接触から生まれる「呼びかけ」の「溝」において、せめぎあい、揺れるヒターノの生のリアリティを明らかにすることは、他の移民やマイノリティ研究では見えにくい面白い側面を提示してくれるであろう。スペイン社会の変動や現状、そして、その社会にある非対称的な権力やカテゴリー配置を把握したうえで、偏見や先入観を可能な限り取り除き、当事者と非当事者の言説や営みと向き合うこと、この綿密な作業が筆者の今後の課題である。

付記

本調査に多大な協力をしてくださった財団や協会の方々、そして、インタビューにおいて貴重な声を聞かせてくださった方々に心より感謝いたします。

註

(1) 反差別国際運動日本委員会によれば、「ロム／ロマ（「人間」を意味する）」は、『ジプシー』と呼ばれてきた人々の名前」「彼ら／彼女ら自身が使用している自称」とされている [IMADR-JC 2003:6]。「ロマ」は、多様なカテゴリーのジプシーの総称であるが、すべてのジプシーが「ロマ」を自称しているとは言い難い。スペイン語には「ロマ」という単語は存在せず、現在のスペインではこの呼称は一般化していない。スペインのジプシーは、「ヒターノ」や「カレ／カロ」を自称とし、彼らにとって「ロマ」と近い意味を持つのは「ロマニ／ロmano」である。以下では、スペインの事例においては「ジプシー」を「ヒターノ」と、一般的な事例においては「ジプシー」と表記するが、当然ながら差別的

な意味合いは一切含まない。また、当事者からみた自己や自称を強調したい場合は〈〉《》内に示し、非当事者からみたヒターノや呼称については、「」『』内に示す。

- (2) ヒターノ支援団体ウニオン・ロマニ (Unión Romani) は、ヒターノ報道のあり方を示した『マスコミ・マニュアル』などを出しているが、そこでも「ヒターノ」という呼称の使用を否定してはいない。また、自らもヒターノである研究者は、「ロマ (ロマニ)」として総称される人びとに共通の特徴や文化などがあるとしても、「ロマ本来」の要素であることは疑わしいと指摘している [Gamella 1996:21-22]。
- (3) 筆者は、スペイン・マドリッドにおいて、2001 年から 2002 年の約 1 年間と 2003 年 9 月のフィールド調査を行っており (そのなかで、計 66 人に対する聞き取り調査を行い、うち、44 人に対して 20 分から 2 時間のインタビューを実施)、現在も随時調査を継続させている。被調査者の選出は、さまざまな制限により無作為ではなく、公私数団体の協力や紹介を経て行われた。本稿で採用したデータは、主に 2003 年 9 月に実施した調査に基づいており、この調査では、ヒターノ支援団体 “X” にさまざまな形で介入している 4 人のヒターノに対し (本稿では 3 人を採用。彼らとは 2002 年 1 月から接触)、呼称や東欧系ジプシーとの関係などを中心に、それぞれ 2-3 回の聞き取りを行った。一連の調査では、筆者は博士論文のための調査者 (非当事者であり、さらに研究者でもある) としてフィールドに介入している。よって、現場における筆者の立場は、本稿でも触れる非対称的な権力やカテゴリー配置を押し付ける側にあり、実際、ヒターノを受動的な存在として捉えるなど、ある種の固定観念をもって筆者が彼らと接触し始めたことは否めない。しかし、EU、政変後の東欧、そして、アフリカ諸国からの移民の増加など、スペイン社会のめまぐるしい変化に彼らがいかにうまく対応しているかを知り、彼らの生のリアリティに衝撃を受けたことが本稿の出発点となっている。
- (4) 本稿は、「呼びかけ」をめぐる問題を社会的に考察することを目的としており、「ジプシー／ロマ」といういずれかの呼称の使用の是非や差別問題を問うものではない。
- (5) 「ほんとうの現実」については、西阪 [1996] にその多くを負っている。彼は、(社会) 問題の厳密な定義や概念化から漏れてしまうような、問題に対する「曖昧な」概念を用いながらの我々の生活や現実を、「ほんとうの現実」と表現している [西阪 1996:66-67]。また、「クレイム」の言説ばかりに目を奪われ、「クレイム」を「クレイム」として成立させているマスコミや行政、および、非対称的なカテゴリー配置や権力などを無視してはならない。従って、これらのシステムや権力の上に成り立ち、抑圧／被抑圧などさまざまな位置にある人びとを取り巻いているリアリティの中での我々の営みこそ、「ほんとうの現実」であると定義しておく。さらに、この「ほんとうの現実」は、研究者が特定のクレイムを恣意的に選び取ったり、また、社会問題の本質を限定したりすることとも異なり、その時、その状況で立ち現れていく、システムや権力の上に成り立っているリアリティにおいて、その状況を動かしたり、権力をかわしたりする力を持った我々の生そのものであり、この「ほんとうの現実」を暴くことはさまざまな二項対立の溝を埋めることになる。
- (6) ここでは、本質主義的なものとは異なり、バトラーが「過程にある主体」[Butler 2000=2002:13] と表現するような、社会において構築過程にあるものとして、竹村が訳出した「行為体」という言葉を使用する。また、この「行為体」とは、ギデنزがいうような、「熟達した聡明な行為主体」[Giddens 1976=1987:16] であり、「本人がメンバーである社会の再生産の諸条件について十分な知識を持っている」「社会的行為者」[Giddens 1979=1989:5] と近い。
- (7) ミードの「主我」と「客我」について、ギデنزが「主我」の《構成的》活動への重点の欠如を見ているが [Giddens 1976=1987:24]、この「主我」が起こしうる「革新」については評価されるべきであろう。
- (8) この 55 人のヒターノは自ら「ヒターノである」と申告した。この申告は義務ではないため、非ヒターノの中にはより多くのヒターノが含まれる可能性はある。また、被調査者の年齢の低さが問題として指摘されうるが、成人を対象とした意識調査が難しく、ほとんど存在しないため、本調査を参照する。本調査を採用する積極的理由は二つある。まず、都市部と農村部のデータが対比させられており、マドリッドという都市部を扱う上で有効であり、また、ヒターノと非ヒターノのデータを対比させた調査が他になく、本調査は貴重なものであると考えるからである。なお、アンダルシア州にはスペイン全体の約 45% のヒターノが集中しており、州の総人口の約 5% をヒターノが占める。

- (9)「ヒターノ」とほぼ同義であり、「スペインのジプシー」を意味する。
- (10)本来、「ロマノ（ロマ）」とはジプシーの総称であるが、ヒターノは、この「ロマノ（ロマ）」と単にルーマニア人を意味する「ルマーノ（ス）」とを混同することが多い。そして、ここでCさんにとって、「ロマノ」という言葉は、「ルーマニア系ジプシー」を意味してしまっている。
- (11)註10を参照。スペイン社会では一般に、東欧系ジプシーは「ルマーノス」と呼ばれることが多い。よって、筆者もここで、「ルマーノス」という言葉を「東欧系ジプシー」という意味で使用しているが、Cさんは「ルーマニア系ジプシー」という限定した意味で解釈しているようだ。
- (12)Bさんは、インタビューの他の場面で、「非ヒターノの人たちとどこで接触しますか」という筆者の問いかけに対し、「僕が行く先どこでも」と少しイライラしながら回答した。非ヒターノとの接触は、ヒターノにとって機会が少なく、難しいものだという先入観を持った筆者の態度に、Bさんは苛立ちを表したようだ。彼は、非ヒターノとヒターノの境界線を越えることがさほど難しいことを示したかったのであろう。
- (13)北澤〔2001〕は、Emerson〔1994〕を引きつつ、ドメスティック・バイオレンスや犯罪における「被害者カテゴリー」に触れ、被害者が「受動的で無力な」存在として定位され、彼らの発言力に聖性が付与される現象や「カテゴリー変動」について述べている。

文献

- Althusser, Louis 1970 "Idéologie et appareils idéologiques d'Etat." in *La Pensée* 151. 山本哲士（訳）『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社 1993.
- Butler, Judith 1997 *Excitable Speech: a Politics of the Performative*. Routledge. 竹村和子（訳）「触発する言葉——パフォーマティヴィティの政治性」『思想』892（1998）：4-46.
- Butler, Judith, Laclau, Ernesto and Zizek, Slavoj 2000 *Contingency, Hegemony, Universality Contemporary Dialogues on the Left*. Verso. 竹村和子ほか（訳）『偶発性・ヘゲモニー・普遍性 新しい対抗政治への対話』青土社 2002.
- Calvo Buezas, T. 2000 *Inmigración y racismo. Así sienten los jóvenes del siglo XXI*. Cauce editorial.
- Emerson, R. M. 1994 "Constructing Serious Violence and Its Victims: Processing a Domestic Violence Restraining Order." in *Perspectives on Social Problems* 6: 3-28.
- Emerson, R. M. and Messinger, S. L. 1977 "The Micro-Politics of Trouble." in *Social Problems* 25-2: 121-134.
- Gamella, Juan F. 1996 *La población gitana en Andalucía. Un estudio exploratorio de sus condiciones de vida*. Junta de Andalucía.
- Gamella, Juan F. y Sánchez-Muros, Patricia S. 1998 *La imagen infantil de los gitanos. Estereotipos y prejuicios en escuelas multiétnicas*. Fundación Bancaixa.
- Giddens, Anthony 1976 *New Rules of Sociological Methods: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*. Hutchinson. 松尾精文ほか（訳）『社会学の新しい方法規準——理解社会学の共感的批判——』而立書房 1987.
- 1979 *Central Problems in Social Theory*. University of California Press. 友枝敏雄ほか（訳）『社会理論の最前線』ハーベスト社 1989.
- Holstein, J. A. and Miller, G. 1990 "Rethinking Victimization: An Interactional Approach to Victimology." in *Symbolic Interaction* 13-1: 103-122.
- IMADR-JC（反差別国際運動日本委員会 ロマプロジェクトチーム）2003『『ロマ』を知っていますか『ロマ／ジプシー』苦難の歩みをこえて』IMADR-JC.
- Instituto de Sociología Aplicada (=ISA) 1990(=1978) *Estudio sociológico: Los gitanos españoles 1978*. Asociación Secretariado General Gitano.
- 北澤 毅 2001「少年事件における当事者問題——カテゴリー配置をめぐる言説と現実」中川伸俊ほか（編）『社会構築主義のスペクトラム パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版：114-132.
- Kitsuse, J. I. and Spector, M. 1977 *Constructing Social Problems*. Cummings. 村上直之ほか（訳）『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて——』マルジュ社 1990.

- 栗原 彬 1996 「差別の社会理論のために」栗原 彬（編）『講座 差別の社会学1 差別の社会理論』弘文堂：11-29.
- 西阪 仰 1996 「差別の語法——「問題」の相互行為的達成」栗原 彬（編）『講座 差別の社会学1 差別の社会理論』弘文堂：61-76.
- 坂本佳鶴恵 1989 「行為論への一視覚——解釈のパラダイム（ゴッフマン・エスノメソドロジー）の可能性をめぐって——」『社会学評論』40-(3): 17-30.
- 佐藤郁哉 1991 「主体と構造——トマスおよびズナニエツキの「状況の定義」論をめぐって」『社会学評論』41-(4): 2-15.
- 水津嘉克 1992 「社会学的分析対象としての『排除』——『構築主義』的視点の可能性」『ソシオロギス』16: 101-118.
- Woolgar and Pawluch 1985 "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations." *Social Problems* 32-3: 214-227. 平 英美（訳）「オントロジカル・ゲリマンダリング——社会問題をめぐる説明の解剖学——」平 英美ほか（編）『構築主義の社会学 論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 2000: 18-45.

（東京農工大学非常勤講師）